

キャンパスを歩き、街を訪ねる。

水族生理学研究室の金子豊二教授と弥生キャンパス7号館A棟地下の水槽を訪ね、森園管理工学研究室の井出雄二教授と西片の老舗豆店を覗く。

地下室の海

水圏生物科学研究用水槽

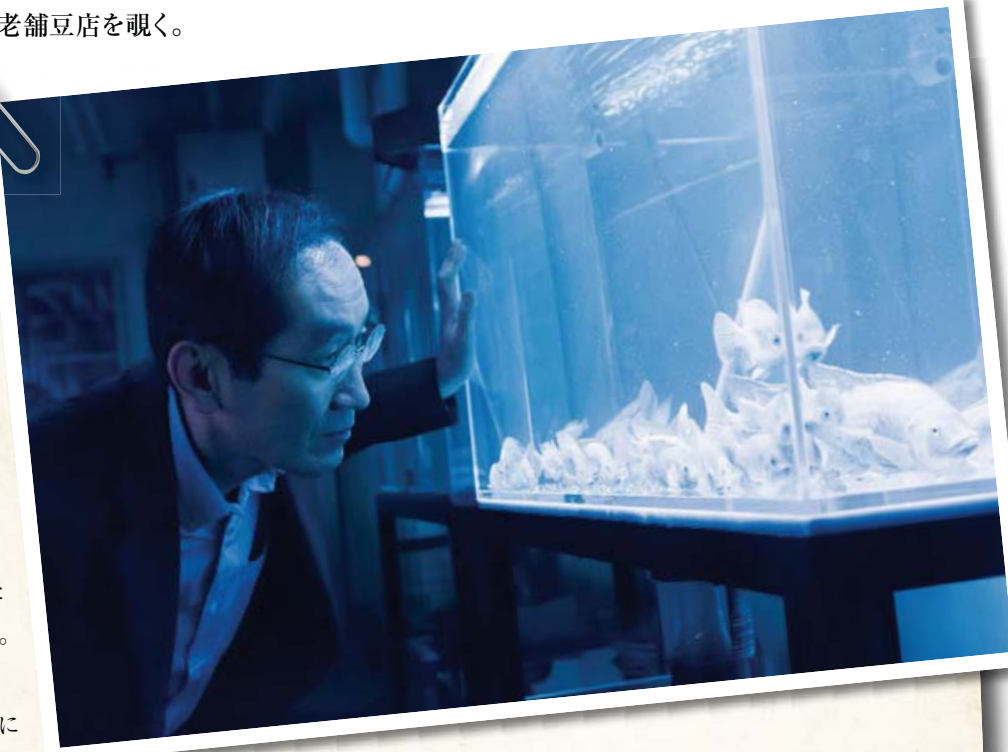
「農」学部地下には海がある」。そう聞いて、水族生理学研究室の金子豊二教授に案内をお願いした。行ってみると、なるほど7号館A棟の地下室に温度調節や濾過の機能を備えた「海」が、大小さまざま20近く置かれていた。大きいものは容量3トンだ。

天井には給水パイプが伸びていて、蛇口に「海水」と書かれている。人工海水かと思ったら、これがれっきとした海の水。東海汽船の

船底に貯めたバラスト水をタンクローリーで運んだものだ。よく見ると「海水」のほか「水道水」や「脱塩素水」の蛇口もある。

青い水槽には掌ほどの大きさの魚がたくさん泳いでいた。「これはティラピア。海水でも淡水でも生きられるんですよ」と教授がこやかに話す。メスが受精卵を口に含んで守り、2週間ほど経つと、孵化した稚魚がふわふわと出てくるのだそうだ。「その間は断食ですか?」と訊くと、「魚は少々食べなくても死にません」と

言う。5年間絶食して、体重が4割減っただけのウナギもいたらしい。なぜこの道に入ったのか、魚の魅力について質問すると、教授は「観てよし、釣ってよし、食べてよし。哺乳類とまったく違う、異世界の住人。こんな面白い生き物はない」と笑った。



ティラピアの水槽を覗く金子豊二教授。

ティラピアは海水と淡水の両方に順応できるが、キンギョやコイは淡水だけ。前者の魚を広塩性と言い、後者を狭塩性という。その仕組みを分子レベル、細胞レベル、個体レベルで研究するのが仕事だ。

そういえば最近、魚で気になるのは塩よりも、放射性物質。すると教授が「魚は自分でカラダをきれいにする力がある」と教えてくれた。魚のカラダにはセシウムを体外に排出する機構があって、それを使って自浄する。体内の放射性物質が半減するのに要する期間のことを「生物学的半減期」というのだそうだ。

昔、東京湾でハゼ釣りをしていた少年が、東大で農学を学び、ハゼを研究して卒業。海洋研究所に13年勤め、10年ほど前この地下室の「海」に戻ってきた。水槽を覗くその瞳には、まだ少年の好奇心が宿っているように見えた。

